

春田のお悩み相談室

けんろん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とあるグリフィン基地にできたカフェ。

そこでは店主であるスプリングフィールドが「お悩み相談」を受け付けている、らしい……。

目次

V e c t o r 編	W A 2 0 0 0 編
14	1

WA2000編

『お悩み相談受け付けます！』

と書かれた札が目飛び込んできた。

相変わらずお人好しなことをやっている、と戦術人形WA2000はその先にいるであろう店主を見据え眉をひそめた。

本格的なカフェがオープンした、という話を聞いたのは幾分か前のことだった。

以前から食堂の一角を借りて度々コーヒーを振る舞っていたとある戦術人形が、ついに指揮官からの要請により正式にカフェを開いたという。

宿舎から少し離れた場所にひっそりと開かれたそのカフェは、元々はバーをやっていた場所だった。昼間はカフェ、夜間はバーになる仕様らしい。

派手な宣伝こそ行わなかったものの、食堂での前評判とたまに指揮官が来るらしいという噂から、たちまち客足が増えた。

そこは宿舎や訓練場からは少し離れているため普段の喧騒は無く、静かで落ち着いた雰囲気の中安らぎを得られる場所、ということでは知らない者はいないほどとなっている

た。

訓練も終わり、銃の手入れもひと段落ついた夕方。

WA2000は、もはや定位置となりつつあるカウンター向かって右から2番目の席に座ると、メニューも見ずに「いつものお願い」と目の前の店主に言った。

「いつもの、ですね。ふふっ、かしこまりました」

注文を受けた店主であるスプリングフィールドは、ポニーテールを揺らしながら手際よく準備を始めた。

「お待たせしました、こちらがいつものホットコーヒーになります」

コト…という木製テーブルの落ち着いた音と共に出されたカップには、ほんの少しミルクの入った甘めのコーヒーが注がれている。

ブラックも飲めないことはないが、『疲れたときは甘いもの』と口癖のように指揮官が言っていたせいで、一息つきにここへ来るときは甘いものを頼んでしまいがちだった。

そう、別に私が甘いものを好きなわけではなく、これは全て指揮官の悪影響によるものだ。決してこのWA2000が、甘いもの好きなわけではない。断じて。

そんなことを思いつつ、淹れたての香り立つそのコーヒーをひと口飲む。

舌で甘みを感じることができ、それでいて甘過ぎない。うまく調和のとれた苦味が、より一層ほのかな甘みを引き立てる。

ほんの少し入れられたミルクは、それらを優しく包み込む。いつもの絶妙な優しい味に、つい顔が綻びそうになる。

「今日の訓練はいかがでしたか？」

エプロン姿の店主は、使った道具を元に戻しながら尋ねた。

「問題ないわよ。当然でしょ？」

「うふふつ、それはよかった。流石ですわ」

「…ねえ……いや、やっぱりなんでもないわ」

WA2000は何かを言いかけた後、そのまま考え事をするように黙り込んでしまった。

スプリングフィールドは話し出すのを待つかのようにそれ以上追求せず、そのまま作業に戻った。

辺りの高精細度スクリーンが燃えるような山吹色を映し出し、そろそろ閉店の時刻であることを告げる。

カフェに来ていた数人の人形たちは、それぞれ会計を済ませ宿舍へ戻り始めた。

「すみません、夜の準備もあるのでそろそろ閉店したいのですけれど…」

「…それで、その、どうなのよ」

WA2000が、意を決したように言葉を紡ぎ出した。

「何のことですか？」

「いやだからその…アレよ」

そう言うWA2000は看板に掛かった札に向かって目配せした。

「アレ?…ああ!もしかして、わーちゃんも相談に来てくれたのですか?」

「わーちゃんって呼ばないで。な、なによ!私が相談事しちゃいけないって言うの!」

「いえいえ、頼りにしてくれて嬉しいですよ♪うふふっ」

スプリングフィールドはカツプを拭くのをやめ、WA2000の正面まで近付き

「それで、どんなことにお悩みですか?」

と微笑みかける。

以前からスプリングフィールドは、悩み相談をされることが多々あった。

彼女本来のお姉さん然とした雰囲気からなのか、カフェというリラックスできる場所の効果か、話のはずみで相談事をされるのだ。

悩み事があればカフェへ、なんて噂が立ち始めたころ。指揮官から『彼女らの悩みや

相談があれば聞いてやってほしい』と頼まれたのだ。

本来ならばそれは指揮官の役割らしいのだが、『彼女らにとっても、私よりスプリングフィールドの方が話しやすいことが多いだろうし』と。

元々カフェ同様好きでやっていたことだったので、快く引き受けた。

「…まあ、その、悩みつてほどでもないんだけど…」

「ええ」

「あつ、ここで話したことは」

「もちろん、他言無用です」

「そう。…それで、その相談なんだけど」

「はい」

「…まあ、いうほど大した悩みでもないし、あなたに聞いてもらうような相談事でも…」

WA2000はもぞもぞと言いつらそうにしたあと、喉を潤すように冷えてしまったコーヒを一口含んだ。

「もう、日が暮れてしまいますよ？」

とスプリングフィールドは困ったように言った。

少しの間の後、WA2000は目の前のコーヒークップに話しかけるようにつぶやい

た。

「わ、私…もつと素直に、なったほうがいいのかな…」

次に間を置くのはスプリングフィールドの方だった。彼女は目を丸くしたまま、反応を伺うように縮こまっているWA2000を見ながら考えた。

素直になるべきか、それが彼女の相談事だと言う。
はて、どうしたものか。

たしかに彼女は、素直とは対極に位置するような態度を度々とはっている。だがその実、素直が隣で肩を組んでいるかのように真意がわかりやすいのだ。

その証拠に彼女がいくら悪態をつこうと、そんな理由で彼女を毛嫌いする者はいない。素直な気持ちを恥ずかしさで裏返していることを、みな知っているからだ。

それほど彼女は、一言で言えばわかりやすい。

その上あのWAがこういう相談を持ちかけている時点で、十分素直になっている。

どう答えたものかと思考を飛ばしていると、しびれを切らしたのか目の前の少女が語尾を荒げて言い放った。

「…ちよつと、なんとか言いなさいよ」

「あ、ああすみません。ええと、どうしてそのようなことを？」

「どうつてことは、ないけれど…」

「その、最初は軽く見られないように思っていただけ…。新しい子が増えた今でも、指揮官はこんな私をそばに置いてくれるから…。でも、アイツの周りには可愛げのある子が多いし、そばに置くならそっちの方がいいでしょ。それで私、もつと素直になれた方がいいのかなつて…」

「なるほど。そういうことでしたか」

WAは自分でも考えがまとまりきっていないのか、釈然としない物言いだった。

だが『指揮官』という名が出てきた瞬間、スプリングフィールドはなんとなく彼女の悩みが理解できた。

「どうやら、素直になれず可愛げのない自分は指揮官にとって厄介者になると思い込んでいるらしい。」

「たしかに、わーちゃんは指揮官に対しては、より一層ツンツンしていますからねえ」
「うう…」

いつもの彼女らしい反論はなく、まさにぐうの音も出ないという感じだ。

「でも、指揮官がそんなことで貴女を嫌いになるような人に見えますか？」

「私はそれなりの態度をとってしまっているわ。嫌われてもおかしくないもの」

「あの指揮官が、私たちの人格を否定すると?」

「それは…そんなこと、ないと思うけど」

「でしよう? 指揮官は私たちそれぞれを大切に、尊重してくれています。このカフェをオープンすることができたのも、皆さんに憩いの場を、と指揮官が気にかけてくださったからこそです。もちろん、私がカフェをやったのもありますけどね♪」

と、スプリングフィールドはWA以外誰もいなくなったカフェを見渡しながら話した。

「だから無理して、自分を変える必要はないと思いますよ。今のありのままのわーちゃんを、きつと指揮官は大切にしてくださいと、私は思いますわ」

「そう…ね。あんたの言う通りだわ」

WAは憑き物が落ちたように比較的穏やかな顔になっていた。

「私たちのような存在にも大切に接してくれる。そんなアイツだからこそ、素直になりたいなんて思ったのかもね…」

「きつと大丈夫ですよ。それでも素直になりたいというのなら、そうですね…いきなりなにもかも素直に、というのも難しいでしょうから、まずは何か一つ素直な気持ちを伝えてみる、というのはいかがですか?」

「素直な気持ち?」

「はい。例えば、日頃の感謝を伝えるとか、労いの言葉をかけるとか。たった一言でも伝えられたら、それだけで変わると思えますよ」

「たった一言、ね…」

「あら、かのエリート人形であるWA2000にとって、そのくらい問題なくできるでしょう?」

スプリングフィールドは意地悪そうな笑みを浮かべて、挑発するように言った。

「と、当然でしょ! そのくらいのこと、すんなりやってみせるわよ!」

と元の調子を取り戻したWAは息巻いてみせた。

「うふふつ、その調子です。やっぱりわーちゃんはそのうやって、元気でいる方が素敵だと思いますよ?」

そう言つてスプリングフィールドは残りの片付けを再開した。

「…あなたに相談してよかったわ」

ポツリと呟いて、残りのコーヒーを飲み干そうとカップに手を伸ばした。

「おーい、スプリングフィールド。こっちはあらかた終わったぞー」

その声に反応して、手が止まった。

「指揮官、ありがとうございます。すみません、在庫整理なんてして頂いて」

「いやあいいんだ、元はと言えばこっちが言い出したことだし。ふいー、いい運動になったな」

指揮官、と呼ばれた男は肩をぐりぐり回した後、腕まくりしたシャツを元に戻し始めた。

「ち、ちよつ、ちよつと待って！」

「おー、わーちゃん。今日もお疲れさま。邪魔して悪いな」

「なんでアンタがここにいるのよ！もしかして、さ、さっきの会話聞いてたの!? っていうか、わーちゃんって呼ばないで!!」

勢いよく席を立ったため、椅子が後ろに倒れてしまった。

「まあまあ、落ち着いてくださいわーちゃん。指揮官は在庫の整理を手伝ってくださいだったので。一人ではなかなか追いつかなくて…」

「そういうこと。元々カフェの営業をお願いしたのはこっちだし、いつも美味しいコーヒーを淹れてくれるからな。何か手伝いができたらと思つて。決して書類業務から抜け出して匿ってもらっているわけではないぞ。うん」

「そ、そういうことは早めに言いなさいよ！まったく…」

転がっていた椅子を元に戻して座り直した。

ひとしきり叫んだら身体が熱くなつてしまった。顔の火照りを感じるのはそのせい

だろう。

そうだ、まず一言伝えるのだった。

素直な、自分の気持ち。

「し、きかん…その、えつと…」
まずい。

何を伝えるか考える前に話しかけてしまった。

いつもありがとう？いやいや、いくらなんでもいきなりそれは厳しい。

在庫整理までやるなんてご苦労なことね。

…ダメだ、嫌味にしか聞こえないだろう。

なんて言おうか悶々としていると、指揮官が思い出したように話し出した。

「しかしまあ実際、わーちゃんも可愛げあると思うよ。なんだかんだ言いつつ気遣ってくれてるのわかるし。素直な意見を言ってくれるし」

上着を着ながら指揮官が言った。

それ聞いたWAは即座に反応した。

「やっぱり聞いていたんじゃない!!」

「いや悪かった。本当は早めに終わってたんだが、言い出しにくくてな。タイミング見計らっていたら聞こえてきてしまってた」

「耳でも塞いどきなさいよねー」

そう言い放つWAの耳は、羞恥からかほんのり赤くなっている。

そして指揮官は襟を正すと、WAの前まで近付いた。

「安心しろ、WA2000。君は今のままが一番だ。責任感が強くて、優しく、なににより自分自身に素直な君が、私は好きだよ」

そう言いながら指揮官はWAの頭をポンと撫でると、

「じゃあ後は頼んだ。そろそろ戻らないとカリーナにどやされる。また来るよ、スプリングフィールド」

と店を出て行った。

「はい、ありがとうございます」

とスプリングフィールドは頭を下げた。

静かに流れるBGMが大きく感じるほど、あたりに静けさが戻った。

「指揮官も罪作りな人ですね。あんなこと面と向かつて言われたら、オーバーヒートしてしまいそうです。ねえ、わーちゃん？」

呼びかけられたWAは、嬉しさと恥ずかしさが相まって、何とも言えない表情をしていた。

平静を装うその顔色は、夕焼けを映し出すスクリーンよりも真っ赤に染まっていた。「そつ、そうね。全く、気安く触れないでっついても言ってるのに。迷惑だわ…」

そうもにもよる言いなながら、椅子を元に戻しちよこんと座る。

結局素直にはなれそうになかったが、そんなこと今は気にならない。

何度もさつきのことを思い浮かべ、全神経モジュールを撫でられた頭に集中してしま
う。

気を抜けば笑みを浮かべてしまいそうだ。

それを誤魔化すために、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

それはいつものより、ほんの少し甘い気がした。

「それであのう、そろそろ閉店を…」

Vector編

『お悩み相談受け付けます！』

と書かれた札が目飛び込んで来た。

元よりそのつもりでやってきた戦術人形Vectorは、ちらりとその札を確認した後、さして気にする様子もなくコーヒーの香り漂う『カフェ』へ足を踏み入れた。

グリフィン基地内にあり、同所属の戦術人形スプリングフィールドが切り盛りするカフェには何度も足を運んでいた。静かで落ち着いた雰囲気が好きだったし、彼女が淹れるコーヒーは格別だったからだ。

元々はあまり食事や娯楽、ましてや嗜好品の味などに興味はなかったし、少なくともただの商品である自分には必要のないものだと思っていた。でもせっかく味覚があるのだから、と指揮官に勧められるがままに飲んで彼女のコーヒーは、“味わう”ということを見せてくれるかのように深く、優しかった。

それ以来、気が向いた時ではあるが足繁く通っている。

そのため、カフェでお悩み相談ができるという噂は知っていたし、店主であるスプリ

ングフィールドが事実、指揮官からの要請でお悩み相談を受け付けているというのも知っていた。

それでも彼女に相談してみよう、と考え出したのはつい最近のことだった。

ふと、気付いたのだ。カフェに行くのに「今日はあの人いるのかな」なんて思考が頭をよぎるようになったことに。

カフェにはたまに指揮官がいる。仕事の合間に休憩という名のサボりをおこなっているのだ。

時々副官を務める身としては厄介な事この上ないが、普段指揮官とあまり話す機会のない人形との貴重なコミュニケーションの場となっていて、多いらしい上に、毎度仕事はわりときっちり終わらせるため、あまり咎める気にもなれなかった。

カフェに行くのに指揮官は関係ない。

あたしはコーヒーを飲みに行っているだけ。ゆつくりとした雰囲気堪能するために行っているだけ。

そう思っても、カフェに行こうとすると考えるようになってしまった、指揮官の存在。それが不思議でならなかった。

しかし、悩みというのはそこではない。

いやこれもだいたい気になるところではあるのだが、もつと深刻な問題を抱えている。

下手をすれば任務に支障が出るほどに。戦術人形としての価値を失いかねないほどに。

そんな個人的な問題に、無関係のスプリングフィールドを巻き込むのは気が引けたが、自分だけではどうしようもないところまで来てしまっていた。

本当は答えなんて出ている。それでも、彼女ならこの答えを否定してくれるのではないか。そんな一抹の望みがあった。

だから、『お悩み相談室』なんて看板を掲げている彼女に協力してもらおうことにした。カランカラン、という心地よいドアベルの音を聞きながらカフェに入る。

「いらっしゃいませ」

と明るく穏やかに迎えてくれるのは、店主であるスプリングフィールド。

指定席というほどではないが、カウンターの一番手前の席に座ることが多い。入り口からすぐの席というのは、意外と人目に付かないものだから。

今回も例に漏れずその席に座る。

空いていそうな時間を狙って来たのが幸いしたのか、あまり客はいなかった。

数名の客は奥の方のテーブル席で談笑しているため、こちらで会話しても聞こえないだろう。

入ってすぐ、”彼”の姿を探してしまったことにモヤモヤしながら、カウンター越し

に注文を取りに来た店主が口を開く前に尋ねた。

「悩み相談を受け付けてるって聞いたんだけど」

確認を行う。

悩み相談をやっているかではなく、あたしなんかの相談役になつてくれるのか、というニュアンスで。

すると店主は変わらず微笑みを向けながら答えた。

「ええ、もちろんです」

その言葉にほっとしたのもつかの間、店主はこう続けた。

「ただし、一つだけ条件がありますわ」

予想していなかった返答に言葉が詰まる。

まさか彼女から交換条件を持ち出されるとは思わなかった。いや確かにタダで悩みを聞いてもらおうというのも虫がよすぎる話ではある。

しかし、正直彼女が何を要求してくるのか皆目見当もつかない。金銭的なものであるなら問題ないが、おそらく彼女はそういうタイプではない。

たまに他愛のない話をする程度の仲ではあるが、そのくらいはわかる。きつとにつこりと笑ってあげつないことを要求してくる、そんなタイプだろう。

そう身構えていると、店主はにつこりと笑い、それでいて少しからかうように告げた。

「うふふつ、そう身構えないでください。何もメイドさんのお洋服を着て、ここでしばらく接客をしてください、なんて言いませんから」

まるで要求したことがあるかのような口ぶりに不安を覚えつつも、その先を促す。

「…条件つて？」

すると店主は人差し指をたて、口づけをするように自身の顔の前へ持つてきた。

「ここはあくまでカフェですので、コーヒーを一杯。ご注文いただけますが、お客様？」
こういう抜け目のないことをするから、彼女は一目置かれているのだろう。

その愛らしくも意地の悪い微笑みに、つい気を張ってしまったのが馬鹿らしくなつて、ふふ、と笑い合つた。

「お待ちせいたしました、こちらブレンドコーヒーになります」

カチャ、というカップとソーサーの触れ合う音と共に出されたコーヒーは、スプリングフィルター特製のブレンドコーヒー。

様々な種類のコーヒー豆を混ぜたもので、このカフェの一番人気。

豊かでほんのり甘い芳香が嗅覚を刺激する。この香りを認識しただけで口の中に唾液が分泌され、このコーヒーが好きなのだ実感する。

ほのかに湯気が立つカップに口を付けた。少し熱い液体が、舌に触れ喉を通る。

ふう、とつい息を漏らしながら、ゆっくりカップを置いた。

「それで、お悩みというのはい？」

スプリングフィールドは使用した道具を片付けながら聞いてきた。

そうだった、悩み相談に来ていたのだった。

「……」

「……」

沈黙が流れる。

いざ話をするととなると、どこから話してよいかわからない。何せ誰かに相談するとい

う行為自体初めてで、そんな日は来ないと思っていたから。

なかなか言い出せずにいると、スプリングフィールドは

「一つ一つ、ゆっくりで構いませんよ」

と気を遣ってくれた。

「…最近胸のあたりが苦しくなることが多くて」

意を決して話始める。

「あら……」

スプリングフィールドは片付ける手を止め、こちらの目を見てしつかりと聞いてくれ

ていた。

「たまにむせ返るくらい感情モジュールが暴走して、体温調節機構がうまく機能しない」
言葉にするたび、自身の不良品としての自覚が芽生えるようで、つい目を伏せた。
「だけど原因がわからない。何度自己修復プログラムを組んでも、異常が見つからない。
壊れちゃったのかな」

不安に押し負け、顔まで伏せた。目の前のカップからはもう湯気は出ていなかった。
「…うーん、そうですねえ」

スプリングフィールドはその形のいい顎に手を当て、何か思考を巡らせている。

「例えばそれは、どんな時ですか？」

「どんな時？」

「ええ、射撃の時とか、朝起きた時とか」

どんな時にそうなるか、と言われて思い返してみる。

射撃の時：はそんなことは起きない。訓練の結果はむしろ向上している。もしその時にそうなるならば自分のような人形はとつくの昔に解雇だろう。

朝起きた時：いや、起動時にそのような現象は起きない。

ならば…？

「事務仕事の時…」

「事務…ですか？」

「うん、副官で事務仕事をするときにたまに……副官?」

自身の中で整理しながらつぶやく。

「そう、副官の時によく起こる」

「そうだ、副官の時はよくエラーが起こる。普段よりもずっと。」

「そうですか……それは1日中ずっとですか?」

「いや、ずっとじゃないよ」

「特にいつ頃起こるかわかりますか?」

「ええっと……」

「また、思い返す。いつだろう、副官当日、朝起きてすぐは何ともない。それから準備して、司令室に向かって……」

「……司令室にいる時よく起こる」

司令室。副官の時はほとんどそこで1日中仕事をする。

訓練や食事などで抜けることもあるが、その司令室にいるときに起こりやすい、気がする。

「司令室、ですか。うふふつ」

何か思い当たる節があるのか、目の前の店主は最初に見た含みのある微笑みをした。

「……何かわかったの?」

「いいえ。まだわかりませんから、もう少し症状について聞いても？」

「いいけど……」

経験豊富な彼女でもいまだ見当がつかないほど、事態は深刻なのだろうか。

そんな不安をよそに、スプリングフィールドは軽やかに聞いてきた。

「司令室で起こる、とおっしゃいましたよね。それは例えば、何かを見た時とかでしょうか？」

「何か……」

司令室で見るものと言えば、そんなに多くはない。

大きめの机、座り心地のいい椅子、報告書等の書類、訪ねてくる人形、指揮官…指揮官。

「……」

なんとなく、彼女が言わんとすることが理解できた。

今までのつつかえが消し去られたように、一気に思考が加速する。

そう、指揮官だ。指揮官を見た時、それは起こる。

司令室でその日初めて彼の顔を認識した時、今日もよろしくと微笑みかけられた時、コーヒーを飲んで一息つく顔を見た時、名前を呼んでくれる時、寝顔を見た時、彼に触れられた時…。

数え上げればキリがないが、間違いなくその時だ。全て記録としてしっかりと保存してある。

スプリングフィールドはあたしの思考が結論を導き出すのを静かに見守っている。決して急かしてはいないが、そつと背中を押してくれるような、そんな瞳。

「指揮官を見ていると」

「…はい」

「…時々胸のあたりを締め付けられるような痛みが生じて」

「ええ」

「でも嫌な痛みじゃない…なぜか心地よくて…ずっと感じていたくて」

「ふふっ」

「触れたいなって、隣に居られたらいいなって、そう…思う」

なぜこんなにもするすると言葉が出てくるか不思議だったが、素直に思ったことを言った。

少なくともそう思ったことは、事実として自身に記録されている。

言葉として口に出すと、実感として湧いてきた。

「…Vectorはその気持^エ持^ラちの正体に、本当はもう気付いているのではないですか？」
スプリングフィールドの指摘に、思わず息を呑む。

この気持ちの正体？そんなもの…

「スプリングフィールドさんは、知ってるの？」

「はい、知っていますよ。とてもよく、知っています」

即答。

彼女は近くを見ているようで、遠くを見つめていた。

まるで誰かを思い描くような。

一口飲んでそのままだったコーヒートを飲もうと、カップに手を伸ばす。一通りの会話
でやけにのどが渴いた。そんなに話してはいないはずだが。

少しぬるくなつたそれは、一口目ほどすんなりとは喉を通らなかつた。穏やかな苦み
が舌に残る。

待っていて彼女はそれ以上何も言つてこない。

カップをソーサーの上に戻し、取っ手をいじりながら会話を再開した。

「もし仮に、知っていたとしても、それは人形あたしたちが抱くべき感情じゃない」

それは、もしかしたら彼女すらも否定してしまう言葉。

なんとなくは気付いた。この気持ちは何なのか。

それでも、否定せずにはいられなかつた。

「本当にそう思っているのですか？」

スプリングフィールドは、戦闘時には敵のすべてを見通すその眼で、こちらを見ていた。

「…少なくともあたしはただの商品で、戦いのための道具に過ぎなくて、嫌われ者の人形で。こんなものは無駄なモジュールが出す、厄介なエラーにしか過ぎないよ」

彼女の眼を見て話すことはできなかつた。

なんとなくカップを傾け、コーヒーが水面に映し出す自分の顔を見た。

ひどく辛そうで、泣きそうな顔。

なんでこんな顔してるのか、余計な疑問が増えてしまった。

「少なくとも私は、そうは思いません」

毅然とした態度ではつきりと否定された。怒らせてしまっただろうか。それなら申し訳ない。相談しておいて相手を怒らせるなど、自分はやはりどうしようもなく厄介な人形らしい。

そんな胸中を知ってか知らずか、彼女は声を荒げることなく続けた。

「私たちに感情があるのは、きつと意味のあることだと思っています」

「意味…?」

「ええ。Vectorがエラーだと言い切るそれも、きつと意味のあるエラーです。だって本当に感情が必要ないと思ってるのなら、あなたはここまで悩んでいないはず

ですわ」

そう言われ何がストンと腑に落ちた。

思わず顔を上げると、そこには想像していたよりも優しい笑顔の彼女が佇んでいる。

「あなたは感情を持つべきではないと思ひ悩むほど、感情を大切に思っているではありませんか。それだけ自分に向き合って、受け止めようとしているではありませんか。こうして悩み相談に来てくれたのが、その証左に他ならないと、私は思いますよ」

彼女の言葉は、その全てがあたしの考えを打ち壊すものだった。

「確かに人形わたしたちは、ある時はただの道具なのかもしれませんが、でもまたある時は、豊かな感情を持ち、人と一緒に生きていけるような、そんな存在でもあるんです。私たちは作られた存在。だからこそ無駄なものなんて積まれていない。きつとあなたの持つその気持ちも、無駄なものではないでしょう」

すんなり受け止められるものではない。

そうではないが、感じていた胸のつかえがとれたのも事実だった。

「そう、かな」

「ええきつと。それに感情が無くなってしまうたら、こうしてコーヒーを飲みに行らっしやることもなくなるでしょう？御ご鼻び頂いにしてくださるお客様が減ってしまうのは、悲しいことですし、困ってしまいますわ」

そう言つて朗らかに笑う店主。

『自分が困る』と他人事にせず、また無理強いしないところが彼女らしい。

そっか。

この気持ちは、無駄じゃないのか。

でもだとしたら、それはそれで困る。

この気持ちが間違つていないことはわかつた。

この気持ちの正体も、なんとなくだがわかつている。

問題は――。

そこまで考えて、居ても立つても居られなくなり、席を立つた。

コーヒーがまだ残つていたため、一気に飲み干す。すっかり冷めてしまつていたが、

今度はもう聞つかえることなく喉を潤す。

「指揮官なら、今日この時間は資料室だと思ひますよ?」

「え」

最後の一口を吹き出しそうになる。なぜ彼女はこうもこちらが考えていることがわかるのか。ひよつとしたら特殊な演算でもおこなつているのかもしれない。

「うふふつ、答え合わせは、あの人とやるのが一番ですわ♪」

なぜか上機嫌な彼女は、鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気です器を拭き始めた。

「…ありがとう」

それだけ言つてカフェを飛び出す。

お代を置くのを忘れてしまった。

どうせ近いうちに行くことになるだろうから、その時に払おう。

これから得る、その答えと共に。

グリフィン基地司令部第三資料室。

そこに指揮官の姿があつた。

本当に居たことへの驚きと共に、今日の副官でもないのに指揮官の行動を予測できた彼女に、少しモヤモヤした。

このモヤモヤも、あたしの悩みも、溢れんばかりのエラーも、きつと全部指揮官のせいだ。

だから、彼に全てをぶつけてしまおう。この胸の中にあるもの全て。

「お？Vectorか。どうしたんだこんなどころまで」

指揮官はちらりとこちらを見ると、呑気な声であたしの名を呼ぶ。そんなことすら記録してしまうくらい、もうどうしようもないところまで来ているのだと改めて思った。

彼は壁際で立ったまま資料を読み込んでいた。近くの机にはかなりの量の資料が散らばっている。司令室まで持ち帰るのが面倒だったのか。

きつとこの資料も、あたしたちが無駄に消耗しないための余分な作業なのだろう。そう思うと余計に体がうずいた。

そして資料室に入った勢いそのままに、扉を乱暴に締め、鍵をかけた。

「え、なあV e c——」

また名を呼ばれる前に彼に近寄る。

少し勢い余って近づきすぎたかもしれないが、どうせそのつもりだった。

指揮官は驚いたのか体を仰け反るも、後ろは壁でそれ以上逃げられない。

彼の息遣いを、匂いを間近で感じられる。戸惑いながらも視線を合わせてくれる。

それだけで、何かが満たされる気がした。でもまだ、その答えには足りない。

「な、なあV e c t o r。どうしたんだ、急に……ちよつと近いぞ」

なんて言うもんだからつい。

「来たのがあたしで失望した？」

なんて返してしまう。

我ながらめんどくさい奴だと思う。でもこれは初期設定のままなのだ。簡単に変えることはできない。

「いやそんなことはないよ」

しれっとした態度で返す指揮官。否定はせず肯定もしない。

そんな無難な態度にますます腹が立ってきた。

さらにぐいっと首元まで顔を近付ける。腕を首の後ろに回して、逃がさない。

「ねえ、指揮官。あたし今、すごいことになってるよ」

彼の耳元で囁く。首を掴まれた猫みたいに大人しくなっている指揮官が、恐る恐る口を開いた。

「それって…?」

「体が熱くて、胸のあたりが苦しくて、エラーが処理しきれない。感情が抑えられなくて吐きそう」

「…吐くなよ?」

わざと茶化してみせる指揮官。でも今日はその手には乗らない。

彼はどうなのだろうか。あたしがこんなにも乱れているのに、彼が平静なのはなんだか癪に障る。

隙間ができないくらい、体を指揮官に押し当てる。彼の鼓動が全身で感じられるのが、たまらなく嬉しいと感じた。

その鼓動は、1分間に100は超える速さで鳴り響いていた。

「あたしでもドキドキしてくれるの?」

「…君だからそうなるんだ」

照れ隠しからかそっぽを向く指揮官。そんな態度も愛おしいと感じた。

指揮官の顔を正面に捉える。視界のほとんどが彼で埋め尽くされる。

ほんの少し進めば触れてしまう距離のまま、彼に確認を取る。

「…あたしじゃ嫌?」

「…その聞き方はずるいだろ」

ずるくなんてない。あたしからすれば、ここままでしているのに触れてくれない方がず

る。

「嫌ならすぐにやめる」

「…嫌じゃないけど」

「けど?」

「あー、上司と部下が——」

「そういうのいいから。どのくらい嫌じゃない?」

「いや…どのくらいって」

「抱いてもいいくらい?」

「直球過ぎない?」

「初めてだけど大丈夫、うまくやってみせる」

「そういう問題じゃ……」

いまだやんわり拒否する彼の唇を奪った。

少しがさついていて、硬くて、離したくない唇。

少しして、指揮官の腕があたしの後ろに回される。

抱きしめ返してくれた。キスを受け入れてくれた。

そう認識した瞬間体の隅々までじんわりと熱が広がるのを感じた。

ああ、やっぱり。この気持ちは——。

でもそれ以上はまたあとで。

だってどうせなら彼に教えてもらいたい、この気持ちの正体。

名残惜しくも、このままでは呼吸がうまくできないため離れる。

指揮官の瞳に自分の姿が映っているのが見えた。

なんだか彼のものになれた気がして、また感情があふれ出す。

「Vector……これ以上は、もう我慢できそうにない」

先ほどまでの飄々とした表情は、余裕のないかわい顔になっていた。

「いいよ、我慢しなくて。……たくさんいじめたから、たまにはいじめられてもいいかな」

背中に回された腕の力が強まる。

そしてがつつくようなキスをした。

少しでも多く彼を感じたいと、無意識のうちに舌を出す。それを包み込むように、彼は舌を絡ませてくれた。

長く、深く、甘いキス。

今だけは、この気持ちを受け入れてあげてもいいかな。

いつか消えてしまうかもしれないこのエラーを楽しむのも、悪くない。

なんとなく、そんな気がするから。